

## 貴志 康一 の 歴史

※写真は貴志康一お妹様の山本あや氏より豊田喜代美に寄贈されたもので、貴志康一記念室に報告し使用承認を頂いています。



〈芦屋の自宅「子供の家（父弥右衛門命名）」での家族写真 1924 年〉



〈左から貴志康一、パウル・ヒンデミット〉



〈1936年の貴志康一〉



芦屋浜にて 1936年

## 貴志 康一(Koichi Kishi)の歴史

※ 毛利真人「貴志康一 — 永遠の生年音楽家」国書刊行会 2006 年より抜粋

- 1909年 3月に康一、母方の実家の西尾家で誕生。
- 1910年 長女の文子（アヤ）が西尾家で誕生。
- 1913年 夏に一家で塩谷浜に逗留。以後、海水浴が貴志家の夏の恒例行事となる。次女の照子が東野田の貴志邸で誕生。
- 1914年 康一集英幼稚園入園。三女の道子が東野田の貴志邸で誕生。
- 1915年 康一、偕行社付属小学校入学。一家は芦屋浜に海水浴のために逗留。
- 1916年 康一は小学校で合唱を指揮した。四女の静枝が東野田の貴志邸で誕生。
- 1917年 康一は各種少年雑誌を購読し、文学、特に詩に親しむ。叔父の義雄としばしば映画を観に行く。五女の奈美子が東野田の貴志邸で誕生。
- 1918年 秋、祖父母を除く一家で芦屋浜に転居。康一は芦屋から偕行社付属小学校に通った。
- 1919年 5年級で甲南小学校に転校。母の恩師大橋純次郎が週に一度家に招かれ、康一はヴァイオリン、妹はピアノ、家族でコーラスを学んだ。ド・ミニアールピアノ演奏会で音楽に感銘を受ける。
- 1920年 父（当時奈良二郎）が甲南高等女学校誉教授就任。父は芦屋に洋館を建て「子供の家」と命名。六女の寿子が芦屋浜の貴志邸で誕生。
- 1921年 ミッシャ・エルマンヴァイオリン演奏会を聴き、衝撃を受ける。父と父の友人達と朝鮮半島へ旅行。次男博之助が芦屋の貴志邸で誕生。初代弥右衛門が京都妙心寺内に徳雲院を再興。康一の父奈良二郎は甲南高等女学校を辞職。
- 1923年 中学3年で甲南高等学校尋常科3年に転入。奈良二郎が二代目弥右衛門を襲名。ヴァイオリニストのミハエル・ヴェクスラーに師事。音楽理論と和声をヨセフ・ラスカに学び、作曲を始める。
- 1924年 甲南高等学校尋常科4年に進級。学校で公開演奏。
- 1925年 甲南高等学校高等科文科乙類に進学。5月17日「貴志康一ヴァイオリン演奏会/三木ホール」開催。JOBKオーケストラ第一ヴァイオリンと直木家の子供オーケストラに参加。
- 1926年 ロレックス時計日本代理店長ワルター・シュルツとの出会いからスイス留学を決意。ヴァイオリニストのエフゲン・クレインに短期間師事。芦屋にて「貴志アーベント」開催。神戸港から渡航。
- 1927年 ジュネーヴのシュルツ家に迎えられ、スイス国立音楽院ヴァイオリン科中等クラス三年生に編入。フェルナンド・クロッセに師事。
- 1926-27年度聴取テストで学年一位のプルミエ・プリ受賞。
- 1928年 クザール音楽会（モントロー/5月、12月）で独奏、御大典記念演奏会（ベルリン）の各演奏会出演。ヴァイオリン科高等クラス二年生に進級。1927-28年度聴取テストで学年二位のメダル賞受賞。クロッセの勧めによりバーデン・バーデンでカール・フレッシュに師事。ベルリン国立高等音楽院でヴァイオリンをカール・フレッシュに、音楽理論をロバート・カーンに師事。
- 1929年 メニューイン（当時12才）のヴァイオリン演奏会を聴いて衝撃を受ける。第4回オーケストラ演奏会（ベルリン高等音楽院）出演。1720年製ストラディヴァリウス「キング・ジョージ」購入。秋シベリア鉄道で帰国。その帰路ピアニストのレオ・シロタと親交を結ぶ。JOBKで独奏を放送。

- 1930年 東京で「ソナタの夕/ピアノ:レオ・シロタ」、「コンチェルトの夕/近衛秀麻呂、新交響楽団」、「ベートーヴェンの夕/ピアノ:レオ・シロタ」、京都で「レオ・シロタ 貴志康一大演奏会」、大阪で「貴志康一 レオ・シロタ代演奏会」の各演奏会出演。父貴志弥右衛門が紺綬褒章受賞。康一は徴兵検査を受けた。シベリア鉄道でベルリンに再渡欧。ベルリン高等音楽学校ヴァイオリン科でヨーゼフ・ヴォルフシュタールに師事。機械音楽科でパウル・ヒンデミットの映画音楽の講義を受講。夜間はラインハルト演劇学校に通う。ドイツ演劇協会の催しで独奏。ベルリン在住の日本人音楽家たちと「同和会」を結成。斎藤秀雄、荒木和子らと交流。
- 1931年 康一が以前より親交があるフルトヴェングラーを加藤鋭五(のち京極高鋭)と共に訪ねる。帰国し、JOBKより独奏を放送。臨時午餐会講演会、独奏会(大阪)、慈善大演奏会(兵庫県)、キシコウイチ提琴大演奏会(和歌山)、提琴独奏会(東京)、「同情週間の催し提琴独奏会」(大阪)の各演奏会出演。「貴志学術映画研究所」設立、中井正一、辻部正太郎、内藤耕太郎らと総天然色映画「海の詩」、前衛映画「十分間の思索」を製作開始。芦屋と大阪にヴァイオリン教室開設。作曲と演奏活動開始。中山岩太がポートレートを撮影。
- 1932年 宝塚交響楽団第84回定期演奏会(宝塚)、第1回洋楽の夕(大阪)、貴志康一作品発表提琴演奏会(大阪)、渡欧告別演奏会ベートーヴェンに捧げる夕(大阪)、レオ・シロタ、貴志康一合同演奏会(奈良)の各演奏会出演。JOBKより独奏を放送。映画「海の詩」「十分間の思索」を公開(東京と大阪)。三木開成館から浪速民謡「赤いかんざし」「かごかき」、文芸春秋社から音楽講座第9編「絃楽」が出版。宮崎丸でベルリンへ渡欧。
- 1933年 作曲家エドヴァルド・モリッツに師事。ウーファ社で文化短編映画「鏡/監督・音楽・出演=貴志康一」制作。映画「鏡」封切。ヴァイオリン協奏曲、日本組曲を作曲。マリア・バスカ独唱会(シュチェチン)、日本人スポーツ舞踏会(ベルリン)にて、歌曲とヴァイオリン曲を演奏。
- 1934年 ビルンバッハ社より歌曲集「七つの日本歌曲」、六つのヴァイオリン曲が出版。「日本の夕べ」開催。ベルリン・フィル「日曜コンサート」に客演。
- 1935年 ドイツ短波放送(ドイツ短波放送オーケストラ)に出演。自作をベルリン・フィルを指揮してテレフンケン社で録音。帰国し、JOBKより講演「ドイツ音楽界の現状」放送。帰朝記念・作品発表演奏会(宝塚交響楽団、関種子)、第1回貴志康一演奏会(新交響楽団)の各演奏会に出演。貴志康一事務所設立(銀座)。
- 1936年 第2回貴志康一演奏会(新響、関種子)、チャイコフスキー悲愴(新響)JOAK放送、ベートーヴェン交響曲第九番(新響)、ワーグナーのタンホイザー第二・第三幕(新響)JOAK放送、渡欧告別藤原義江独唱会(宝塚交響楽団)、ヴィルヘルム・ケンプ演奏会第二夜(新響)、第166回新響定期演奏会/ピアノ:ケンプ、第3回プロムナードコンサート(新響/エルンスト・トマシッチ)、「ケンプ告別演奏会(新響)、宝塚交響楽団第118回定期演奏会(ロバート・ポラック)、ベートーヴェン交響曲第九番(新響/ベルリンオリンピック蹴球選手壮行会)の各演奏会に出演。ドイツで自作自演のレコード二枚が発売。盲腸により入院。妹の照子死去。父弥右衛門死去のため康一は大阪へ戻り葬儀を取り仕切り大阪大学病院へ入院。1937年 芦屋で静養生活。自作自演のレコード道頓堀が日本で発売。秋、腹膜炎により大阪大学病院に入院。11月17日心臓麻痺で死去。享年28才。20日、葬儀が大阪綱島の貴志家本家で、告別式が阿倍野斎場で執り行われた。

貴志康一がドイツ・ベルリンで出版した日本歌曲（ピアノ伴奏版）の楽譜表紙

KOICHI KISHI

貴志康一

JAPANISCHE LIEDER



VERLAG  
RICHARD BIRNBACH  
BERLIN